

12月



あの日のあの川 リレー日記 ～第11話～



あの日のあの川
リレーDiary

みなさんはどこの川でどんなことをした記憶がありますか？幼少期や青春時代に体験した川での記憶を日記として掘り起こして語るコーナーです。リレー形式で毎回次の人にバトンをつなぎます。

第11話主人公 鴨志田穂高

(筑波大学大学院 生命環境科学研究科 環境科学専攻 白川(直)研究室『川と人』ゼミ)

(□川ガール・■川系男子)

(出身地を流れる川：茨城県田尻川)

「私の川めぐり拾遺集」

いつのこと？：小学生～現在まで

どこの川？：八溝川、田尻川、小貝川、鬼怒川、那賀川、庄川、高梁川など

筑波大学で『川と人』ゼミの一員になって以来、全国のさまざまな川を目にしてきた。幼少期の思い出も含めて、今日までの川めぐり遍歴を書き綴ってみようと思う。

幼少のころ、夏に父方の実家に帰省すると、決まって近くの八溝川で水遊びに興じていた。県下最高峰の八溝山に端を発するこの川は、山深い大子の自然をかき分けて久慈川へと注ぐ。かつての父親がそうであったように、私もまたこの川で水切りや生き物集めなどを楽しんでいた。中学に入ると川で遊ぶ機会はめっきり減り、身近な川といったら家の前を流れる田尻川くらいのものであった。この川は、住宅街を縫うように走り流路がコンクリートで固められた典型的な都市河川である。流れのない水面を眺めながらの通学は退屈そのもので、ときおり台風の大雨を一気に流し去る姿だけが「ああ、いちおう川なんだな」と思える要素であった。それでも、自治会の方や子どもたちによる一斉清掃が行われていたから、やはり地域にとっては大切な川なのだろう。そんな、川との関わりが薄い中学・高校時代を経て、私は筑波大学の白川ゼミに入った。

白川ゼミでは川を実際に見る機会がとても多い。大学の近くの小貝川や鬼怒川をめぐるところから始まり、夏になると、一つの川を源流から河口までめぐるゼミ合宿が行われる。年ごとに全く異なる流域を駆ける4日間の行程には、川の魅力が詰まっている。日本屈指の多雨地域を流れる那賀川では、源流を目指して進むもあまりの道の悪さとガス欠で断念せざるを得なかったのが忘れられない。ダム建設の現場をめぐった庄川、歴

史ある街々を見学した高梁川など、流域をまるごと学べる貴重な機会だったとあらためて思う。

地域貢献プロジェクトとして、遠く九州の河川にも赴いた。福岡県を流れる遠賀堀川では、地域の方々が昔の川の輝きを取り戻そうと奮闘している姿に刺激を受けた。長崎県東彼杵町では、町内を流れる彼杵川、千綿川、串川、江の串川を活用したまちづくりに向けて試行錯誤を重ねる日々を過ごした。

そんなゼミ生活の中でも、私の川めぐりで最も多くのウエイトを占めるのは、本ニュースレターでもお馴染みの坂本貴啓さんによる河川市民団体調査である。109水系すべての市民団体を調べあげるといふこの壮大な取り組みに、私を含め多くのゼミ生が同行した。中国地方調査で早朝に訪れた高津川は、これほどまでにきれいな川があるのかと思わせる美しさだった。続く四国地方調査は、個々の川が持つ魅力を感じる旅であった。荒々しい流れで釣り人を掻き立てる物部川、澄み切った蒼をたたえてゆったりと流れる仁淀川、河口付近まで狭窄部の風景が続く肱川など、それぞれがそれぞれに個性を主張していて興味をそそられた。交通の便が悪い北海道では、路線バスまで活用してほぼ全ての一級水系を回った。日も落ちた湧別の事務所で担当の方が暖かく迎えて下さった時には、こんな遠くの川にも日々携わる方々がいらっしやることをあらためて感じた。レンタカーが使えないという制約のもとでの調査行程はタイトだったが、良いこともあった。中国調査で寝台列車から見る夜明けの高梁川は格別だったし、中部調査では一級河川の最寄り駅で乗り降りを繰り返すという芸当もやってのけた。

思えば川と鉄道の相性はなかなか悪くない。「越すに越されぬ大井川」も今や車窓の一コマであるし、川が切り開いた谷を走るローカル線は一種のアトラクションだ。川の表情はいつも鉄道での移動に花を添えてくれる。一度、博多からつくばまで鈍行で帰るといふ愚行を犯したことがある。カメラがあったので、一級河川を渡る度にシャッターを切ろうと思いついた。広島の本田川から始めて、日没を迎えたのは豊川を渡ったあたりだったろうか。初めは暇つぶし程度にしか考えていなかったが、撮影していくと一つ一つの川の表情がすべて違うことに気付いた。狭い島国にこれだけ個性豊かな川が流れているのかと、あらためて実感した。

早いもので修了の足音が近づいてきたが、川好き川キチ川系男子にして川の伝道師たる坂本さんに言わせれば、私の川の経験値にはまだまだ伸びしろがあることだろう。修士論文を書き上げた暁には、厳冬の只見川にでも足を伸ばしてみようかと思っている。

(次は 有木吾郎 さんにバトンを託します)



朝焼けの高津川



2012年ゼミ合宿 in 那賀川
(右から6人目が執筆者)